



ニュースレター

若手研究交流会 2025 開催報告

Report of the Young Researchers Meeting 2025

市村駿汰^{1,2}, 桑原佑典³, 渡辺泰士⁴
Shunta Ichimura^{1,2}, Yusuke Kuwahara³, Yasuto Watanabe⁴

2026 年 6 月 24 日受付, 2026 年 7 月 15 日受理.

1. 国立研究開発法人産業技術総合研究所 (shunkeiso14@gmail.com)
2. 名古屋大学大学院環境学研究科
3. 関西学院大学生命環境学部
4. 国立研究開発法人国立環境研究所

はじめに

第11回地球環境史学会年会の前日である2025年11月29日に、岐阜県瑞浪市において若手研究交流会として野外巡検と博物館見学を実施し、瑞浪市化石博物館および瑞浪層群の露頭を見学した。本稿ではその開催報告を行う。

事前準備

2023-2024年度の地球環境史学会年会に併せて実施した若手研究交流会が好評だったことを受け(松本ほか, 2024 ; 渡辺ほか, 2025)、2025年度も年会に併せて若手研究交流会を企画した。過去の若手研究交流会は、大学の教室を使用し、レクチャーやグループワークを通して参加者同士の交流を行う座学形式で実施していた。今年度は、これまでとは実施形態を変えて、野外での地層観察等を行う巡検形式で開催することになった。訪問先として岐阜県瑞浪市の瑞浪市化石博物館と瑞浪層群を選定した。フィールドワークと博物館見学を通して、①地質調査に基づく古環境研究への理解と関心を深めること、②博物館学芸員の業務内容およびキャリアパスについて学ぶことを目的とした。

若手研究交流会の形式や訪問先は、世話人で6月上旬ごろに決定した。今回は年会開催日が日曜日と月曜日であったため、開催日前日の土曜日を開催日とした。その後、瑞浪市化石博物館の安藤佑介学芸員に講師を依頼し、下見を実施し正式な巡検行程を決定した。当日の移動については、訪問地点間の移動距離や公共交通機関の利便性を考慮し、中型バスをチャーターして移動することになった。このため、巡検の実施には博物館入館料や保険料等に加え、バスのチャーター費用が必要となったが、地球環境史学会より開催費の一部を支援していただいたため、参加費を抑えることができた。

また、普段は野外調査を行う機会の少ない学生や若手研究者の参加を促進するため、巡検に必要な道具のうち、ヘルメット、ハンマー、平タガネについては名古屋大

学で管理しているものを必要分確保し、当日の受付時に貸し出した。最終的に、当日の行程は以下の通りになった。

行程

9:00	名古屋大学集合
9:30	名古屋大学出発
10:30	瑞浪市化石博物館着
10:30-11:30	瑞浪市化石博物館(Stop1)見学
11:30-12:45	地層見学地(Stop2)見学・昼食
13:00-14:00	宿の露頭(Stop3)見学
14:30-16:00	野外学習地(Stop4)見学
17:00	名古屋大学着
19:30-21:30	懇親会

参加登録の案内は、9月初旬に概要とともに学会メーリングリストに投稿した。その後、9月中旬の学会要旨締め切り直前にリマインドメールを投稿した。また、学会のプログラムにも開催概要を掲載していただいた。最終的な参加者は世話人も含めて巡検が23名、懇親会が24名であった。参加者の構成は、主に博士課程学生(9人)、修士課程学生(10人)であったが、大学教員・研究員(2名)、学部生(4名)の参加があった。参加者の専門分野も、微化石、有機・無機分析、同位体分析、気候モデリングなど様々であった。

巡検当日

当日は集合場所である名古屋大学や訪問先である岐阜県瑞浪市はいずれも快晴であり、絶好の巡検日和だった。予定通りに名古屋大学をバスで出発し、移動中にバス車内で参加者の自己紹介を行った。約1時間の移動の後、最初の訪問先である瑞浪市化石博物館に到着し、安藤学芸員と合流した。

Stop 1: 瑞浪市化石博物館

本館には、瑞浪層群から産出した哺乳類、魚類、貝類、植物などの化石を中心に多数の標本が展示されている。2025年には展示室の大規模なリニューアルが実施された(安藤ほか, 2025)。到着後、安藤学芸員から瑞浪層群の化石の展示解説や、博物館学芸員としての仕事について紹介していただいた。特に、2022年に瑞浪市内で発見された哺乳類化石であるパレオパロドキシア (*Paleoparadoxiidae* gen. et sp. undet.; 安藤, 2024 など) の全身骨格化石については、特別に展示ケースから標本を引き出していただき(図1)、展示ケースの設計意図や工夫について解説していただいた。さらに、博物館において標本を展示と研究の双方に活用することの重要性についても説明していただいた。



図 1. 瑞浪市化石博物館での展示解説の様子。パレオパラドキシアの標本を通常時(A)から外に引き出してもらった(B)。

Stop 2: 地層見学地

本地点は博物館の東部に位置する道路沿いの切通しで、瑞浪層群明世層戸狩部層上部、山野内部層、狭間部層、生俵層 (名滝礫岩) からなる一連の露頭が垂直・水平方向に観察できる。戸狩部層は凝灰質細-中粒砂岩からなり、ハマグリなどの貝化石を含むコンクリーション層や2層のペアからなる火山灰層 (アベックタフ) が観察できる。最上部にはウソシジミ密集層(*Felaniella* Bed)が見られる。山野内部層は下位が凝灰質砂質泥岩、上方が暗灰色泥岩からなる。本層は多数の火山灰層を挟むほか、ミエゲンロクソデガイ (*Saccella miensis*) やシラトリガイ (*Macoma optiva*) などの貝化石が多産する。有孔虫化石や介形虫化石の存在から、堆積場は閉鎖的な内湾環境であったと推定されている (瀬戸, 1992; Irizuki et al., 2004)。参加者は各自観察地を散策しながら、コンクリーション層や火山灰層などの地層を側方へ追跡した。本地点では同じ層準であっても岩相が側方に大きく変化する様子が確認できた。

Stop 3: 宿(しゆく)の露頭

本地点は沢沿いの露頭であり、瑞浪層群宿洞層、生俵層 (名滝礫岩を含む) を観察できる。宿洞層は前期中新世の浅海層で、有孔虫 (*Miogypsina-Amphistegina-Robulus* 群集; 多井, 1958)、介形虫 (Yajima, 1992)、サンゴ (江口, 1974) 等が産出する。これらに基づき、宿洞層は熱帯気候下で堆積したものと考えられている (瀬戸, 1992)。名滝礫岩は生俵層の基底礫岩であり、宿洞層から再堆積したと推定される底生有孔虫が多産する (瀬戸, 1992)。生俵層は中期中新世の深海層であり、有孔虫 (多井, 1958)、放散虫 (菅野, 1976)、珪藻 (河邑ほか, 2011)などを多産する。微化石によると生俵層は水深200-300 mの温暖な海域で堆積したものと考えられている。宿の露頭では安藤学芸員による解説が行われ、その後参加者は各々露頭観察を行った(図2)。本地点では宿洞層より大型の底生有孔虫が多数観察されたほか、サンゴやフジツボの破片などの化石も多数確認された。



図 2. 安藤学芸員(左)による解説を受けながら宿の露頭を観察する参加者

Stop 4: 野外学習地

本地点は土岐川河岸に広がる露頭であり、瑞浪市化石博物館に申請することで一般の来訪者も化石採集を体験できる。瑞浪層群明世層戸狩部層と山野内部層が分布しており、全域で生痕化石が産出し、下流側ではコンクリーションが多数観察される。戸狩部層からはウソシジミ群集に属する貝化石が産出し、最上部ではウソシジミ密集層がみられる。山野内部層からはミズナミホタテ (*Kotorapecten egregius*) 等の貝化石が多産する。戸狩部層下部-山野内部層下部から産出する貝類等は比較的冷温な環境下に生息していたものである。巡検当日を含む数日間は降水がなかったため、通常は水中に沈んでいることが多いウソシジミ密集層などが地表に露出していた。安藤学芸員によるウソシジミ密集層の解説が行われ、参加者は各自でハンマーやタガネを用いて多くの貝化石を採集していた (図 3)。



図 3. 参加者が採集した貝化石。古屋俊和氏(東京大学)提供。

おわりに

今回は地球環境史学会の若手研究交流会として初めて巡検形式で開催したが、問題なく予定通りに実施することができた。特に、今回の参加者には普段研究で露頭を観察する機会が少ない方も多く、そのような参加者にも実際に露頭を見て、化石採集する体験を提供できたことは有意義だったと考えている。一方、巡検だけでは参加者間の新たな交流を促進しにくい側面もあるため、班分けを行い観察対象に応じた課題を設定したり、グループワークを行うことで改善する余地もあると感じられた。

謝辞

安藤佑介氏（瑞浪市化石博物館）には、ご多忙の中、本若手研究交流会の講師をご快諾いただき、巡検計画について多くの助言をいただいた。松井和己氏（名古屋大学大学院）と清一凛氏（名古屋大学理学部）には事前準備、当日の運営および後片付けにご助力いただいた。林誠司氏（名古屋大学）には、巡検で貸し出す道具類の手配をしていただいた。地球環境史学会からは開催費の一部を援助していただいたほか、学会プログラムに本若手研究交流会の案内を掲載していただいた。この場を借りて感謝申し上げる。

文献

- 安藤佑介, 2024. パレオパラドキシア瑞浪釜戸標本の研究(概要). 瑞浪市化石博物館研究報告, 50, 3, 1-16.
- 安藤佑介, 新村龍也, 小田隆, 徳川広和, 甲能直樹, 2025. パレオパラドキシア瑞浪釜戸標本の復元と展示. 瑞浪市化石博物館研究報告, 52, 1, 107-120.
- Irizuki, Toshiaki, Yamada, Katsura, Maruyama, Toru, and Ito, Hitomi, 2004. Paleocology and taxonomy of Early Miocene Ostracoda and paleoenvironments of the eastern Setouchi Province, central Japan. Micropaleontology, 50, 2, 105-147.
- 江口元起, 1974. VIII. 岐阜県瑞浪市附近の中新世珊瑚. 瑞浪市化石博物館研究報告, 1, 227-231.
- 河邑圭太, 須藤斎, 柳沢幸夫, 2011. 岐阜県瑞浪地域中部中新統生俵層の珪藻化石年代層序. Diatom, 27, 17-32.
- 菅野耕三, 1976. 瑞浪層群生俵累層の放散虫化石. 瑞浪市化石博物館研究報告, 3, 17-24.
- 瀬戸浩二, 1992. 瑞浪層群の底生有孔虫化石群集. 瑞浪市化石博物館研究報告, 19, 165-191.
- 多井義郎, 1958. いわゆる戸狩階について—瀬戸内中新統の微化石層位学—. 地質学雑誌, 64, 757, 516-525.
- 松本廣直, 渡辺泰士, 小坂由紀子, 樋口太郎, 市村駿汰, 高橋聡, 2024. 若手研究交流会開催報告, PALEO, 12(2), 11-16.
- 渡辺泰士, 桑原佑典, 木野佳音, 佐久間杏樹 2025. 若手研究交流会 2024 開催報告, PALEO, 13(1), 1-8.